

切明書院藏書  
四十八

雜記之部  
雜誌之部

庫	文	閣	內
二	三	三	和
一	六	六	書
函	二	三	類
六	三	二	
架	冊	號	

89  
閣

內閣文庫	
番號	和 36632
冊數	23 ( 22 )
函號	211 122





卷  
89

近世外史卷之四十七目錄

雜記之部



- 一 士農工商耆の用心の事
- 一 一國の性命つゝあゝ飯の事
- 一 土星を計る農民の事
- 一 田家晴雨の忘るゝの事
- 一 天地一年一呼吸の事
- 一 會津百姓古澄文の事
- 一 石川百姓古澄文の事
- 一 長常清帝の御座を彫る事
- 一 由井家古戦場戸板の事
- 一 結智丸船沈ふ事
- 一 山上及記徳平砥石の事
- 一 白隠禅師例隠の事
- 一 十人目付深秘の事
- 一 宇治坊大貝を吹く事
- 一 禅僧行長を捕ゆ事
- 一 心徳寺為教坪定あゝ事



- 一 西遊傳の回数定り事
- 一 一紙の扇復奇持事
- 一 秤の目を賞め事
- 一 一城の中非常を為す事
- 一 火の用かた火危し事
- 一 秋津虫をらんちし事
- 一 天竺の宝を獲たり事
- 一 耶蘇の者石を城を築事
- 一 湖水の丸を船事
- 一 海を引刻り事
- 一 組玉井の振玉井事
- 一 長尾景春五右衛門事
- 一 仙臺通寶楮銭事
- 一 下野の五珠銭を堀り事
- 一 廟の酌をた実事
- 一 田舎粉所制禁事
- 一 一制禁五ヶ條事
- 一 長崎の田舎粉を搥事
- 一 五右衛門の日記を若水事
- 一 待りまじり事

- 一 三まの古糸目の事
- 一 青張の日傘停止事
- 一 惣家の糸下成事
- 一 江戸蒨責浪運上事
- 一 山のまふげの事
- 一 江成寺の鐘事
- 一 南海の海に喰ま事
- 一 鯉を牛の角を釣事
- 一 妖の字女篇の事
- 一 紙を古く事
- 一 天海を悪衣の事
- 一 兜のり馬帽子着事
- 一 名物の兎敷品の事
- 一 糸原物の價ちんご事
- 一 苗字の流麻事
- 一 松平出羽守求肥胎事
- 一 負之神を祭る事
- 一 政考の墓を築り事
- 一 舟の骨やう年の骨やう事
- 一 医者よ十の信事



- 一 吉益赤洞水火比布の事
- 一 霍乱屠獲散を用ひの事
- 一 医を学ぶ者を費す事
- 一 泰山神之父母の像を仕へる事
- 一言葉を以て交る事
- 一 女子の女貞ををばふ事
- 一言野六千の智八十の事
- 一 風呂敷の法を包む事
- 一 西世の困り、為元の事
- 一 清閑寺智念傳馬回益の事
- 一日蒲を畑他の利なき事
- 一 山道入河をよむ礼の事
- 一 流石の社丹喉の事
- 一 深草の信大善の軸を買ふ事
- 一 暴將某の自盡の事
- 一 盲人の死を探る事
- 一 戦後各地震母の事

右 七十三巻條

近世外史卷之四十七

水藩 筑山足田棟隆編輯

不義の武士は大小をかきこみ己の志を得て次たりし出身  
 高きを驕奢ありて後をた家を亡びし身を区し  
 この古今其例すらありて高人ありし高きを  
 秤ありて銀子を有する時を家内も富貴え大高と  
 測りて天秤ありて浪高を由納する事ありて成家の亡ひ  
 ありしもの多しとを述べし士農工商の奢侈乃困るな  
 るんをりて危うし







日あり蘿蔔あり當日より前よりまゝく時、肥とてきし  
れく、時を虚耗し、一尚書堯舜の遺制、是を  
先あるに如し

雨歇んとする時を茅屋の上へ煙を透り昇るは果し  
天氣好む夏日の早天は富あり、河の蟻の巢は向く  
霧のかきこり、時を必を晴しあり井の水の濁り、時を  
み雨あり高きあり風ありつゝ木の葉をうらを足する時を  
翌日雨あり大園中をあり夢を、伏する時を、かあり、此を  
雨あり、狐あり、時を三日の中へ雨あり、好む

天地の氣を一年のり、一呼吸を夏至より冬至まで  
百八十日の間、北極氣北より推し、南より行く、其は常  
西北の風吹き日輪し其氣を推し、陰は南より移る、其  
物皆陰あり、推移するは天地の一呼吸あり、以て突く息  
百八十日あり、其を盡すは引息と成る、夏至して  
百八十日の間、南極氣南より推し、北よりゆく、其は  
常に東南の風吹き日輪し其氣を推し、陰は北より  
移る、其は物皆陰あり、推移するは天地の一呼吸あり  
以て引息と百八十日あり、其を盡く都合三百六十日あり



一年とありて天地の一呼吸備くくみ以て南北とて流く  
推さるりゆへに在き天地を太く推さるる遂に轉り  
ありて天の運り常と東と西と轉りて旋りて意  
如斯あり天地の中を生るる物皆を旋りて意  
金銀如夢とし東南と兵ひ於ての蔓草牽牛草と  
葡萄忍ぶの類皆を旋りて人の陰莖ありて旋  
の委ぬる

奥州會津松平肥後守の禎池田村百姓惣平所年  
貞徳殿の身許にお家内五拂の御棟あり箱一あり

内之證文を一通

世及小秋家へ渡りて在る粟七斗借用に若  
歸國旅費とて時々將軍に之を領知あり也

文治四年四月十八日

伊豫守義経判

武藏坊兼光  
飛井六郎

會津池田村惣平度

右ノ証文會津守所領に在りて山月番戸田宗女正守あり  
ありて惣平に代りて石見傳取とあり











目付も定るり燕の家より奉起るる是殿中の厳秘

相模大山の常盤城より山伏あり薩摩と号する大目せし山伏  
より外に吹雪のあり吹雪は五十町餘ありや氏燕  
山田原北条出陣あり大山寺より山伏あり鶴幸より目吹  
今も其子孫貝をよく吹雪りあり

関原の禅僧林菴主人石田より叛きし時山西提津より長城  
堀挿し八幡山の陣營は敵より鷹美より黄金指輪を  
とりしれりやきし朝鮮玉より武威を震ひし山西

僧侶師より捕らるるしは浅きし是を山西に契利  
斯尚の亦宗よりたむを身は底つる事をとるしは  
一旦の武勇より道を知りしは初る事あり

所獲幸の武士強ふ石の屋敷より七の百坪より五百坪  
まゝ二百石より千坪より二三百坪より百石より五百坪  
より百五十坪より所帯より柵あり殿中より執り  
の命を待つらるるしは武士の屋敷三百坪より百坪より  
殿中よりありありを改める家あり命を交る武士は  
二百坪より五六十坪ありを限るは廣きも限る諭を



獲きし根より減せたる政元年三月定先りし

百姓の夜爰を間口七間より其の十五間の定めと美濃國可児郡天正十二年の檢地帳より石田重政のまのせしりしありしを

享保中日光 市社系より所供の大名少左衛門尉掛合より造りし日を限り乾法よりありし所居形の上敷斗を著日以前より取掛る由にありし其の修より竹束を伐り柱と成り根を西の内代細工の限りより折り奉りの中より長く

續きし根を重く根根より一時より少左衛門尉掛合より霧雨ありし五六日は踏りしと退散の時を居りしなりしを候りしと退りし奇特のりありしと申すありし

秤の目を新よりいりやし奉りの中より二層よりいりしは秤目を知り玉を添えりしありし其家の法より薰物をつみ或は茶成調合より分量をたしりしはかありしありしはありしと申すのり耐し秤を入るにありし雅輔世系







ちし愛ありし一為財の城郭の如く堅固あり唐より  
あきる好ましく市を治物治あり江戸市丸の天守雷火  
あき焼くその回財は教前之城の天守も雷火の焼  
あきしむぬ和よと百六十年あし心方の事好む右福井  
の城り度松より世家のよの五國の人を長者後々  
移りし一住宅を八ヶ岳造りし一晋傍好む  
東照宮の家住あり一都のよ山由張りしよの好むといふ

江湖の丸を船をくくよ志を便利あり造形ゆへに船工よ  
尋ねしよ船直のいし先江湖の水を潮とちうひし

水力よもくく一船物を積むよ事きよ場へひりし  
船の傍り丸木の控刻しよをお居し船脚を助すく  
あきを表木より一板江湖を深きゆかきを好むゆつよ  
碇をいさしゆ一船のよとく一は川あきけよ清く船を  
のりしむあつし一くより船の底を河船船しよも  
あきり各控しちりあし船のりしよゆし一深し  
表あり浪をうけし船の動揺しよ志し一あき  
よつきし一ゆき現ありしよあきしよとつし

海に訓下部あきしよの産むしよ訓を云ひ



らまぬまうの深ありみんぬあり五輪の建立も云々  
⑤④③②① 火土水風金 ぬり金糸自縛あり生々風糸水成  
る加先もぬき種とて海の乾訓子宮の血水時成る浮  
き

組々天井をぐる天井といふは字々書言高考極  
は合天井とゆきしといふもやおありなり極天井と  
あり書ききり正多形一極隔々四方の組  
まをいへば極をり々と唱ふるは音便あり己の極子  
くくくくくく思ふくくく後因情偶奇をんくく

天井のりを頂極といふくちを昂ち天井あり

九六減の日幸のいひ傳へくく上極極程憲政の家老長尾  
将監々孫法右衛門くく四郎右衛門 政伊玄々景春 仕始くくく  
いづれ成わくは年玄々日幸くく初くくくあきくも  
元々唐よりぬむ唐の玄宗皇帝揚貴妃を愛く朝  
政を疎んぬひく安祿山々進めくく諸國の錢を  
きくく言々百の内く四くぬく運上を  
くくくぬきくく淵鑑類函とく書又下吊類多  
閑くく伊玄を其例をく極くくくぬき



太上天皇天明四年奥州鑄仙臺通寶

是は楯たての鉄錢を以て仙臺の地のみ通用する為  
鑄する諸國に分散せし今ハ通用する西國  
たる長崎の通用するは錢泉彙の如し

元明元年五月下野國某々々の五珠錢を夥數採掘し  
て又其金を熔ひて流慶長に於て物ありきと見  
し田原北条の臣某々々の爲めに秀吉公  
田原攻の時某々田原に在城して攻め間道より

秀吉公軍をせりて燒討せりて其信臣  
あり埋置しをよ一言ふる及びし

源平盛衰記より那須赤市々の的の子あり是れ其言なり  
平家を取弟公家存ゆへ故実を知りし如く類聚  
國史管領相記 仁明天皇の時野侍屋侍たるあり其的  
あり其時を具し扇を用ひし如く

大敵大君内代の煙草と世の費ありしを堅く以て停止し  
あり江戸町に於て其時を留めし如く日本橋の傍



その馬を結ひ江戸中の馬をせしむるを集むるありしを野邊  
とありし其時の頃をて赤城中評定所之煙草盆の  
数を今と對ししあきぬを形のみく堅き法度とす  
たかくは煙草の病中まふとを強らむ

元和二年十月三日之旨出されの趣

條

- 一 たるこ傳り者町人五十日百疋二十日自分と根と
- 一 同賣りとの
- 一 同買りとの同方との

- 一 同傳り者 ぬる料百疋三人身と鳥目百文と出
- 一 同傳り代友ぬる料ぬ賣りて出
- 一 同條堅き伝出也仍も細か件

煙草の傳止む 元和元年六月二十八日五十一條之旨出  
し世の談話多しぬる色も 從古くは慶長十四年  
七月十四日政府より京都へ使者を遣はししあきぬ公事  
多し政のみありしを煙草法度のよりあり  
禁むるし創業記よりありし元和元年より  
七年系より六の禁ありしと知るしかくも世人



好む事あり〜く懐けをきり〜くは遠く〜禁令あり〜  
〜名〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
國より渡り来り〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
慶長十年長崎橋の馬場へ植〜〜を原始〜〜あり〜  
吾邦へ煙草を植への始〜〜

三月元日初〜汲水を若水〜〜〜〜〜  
立春の日〜汲む初の水を若水〜〜〜  
春をゆ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
已待ハ己余余推〜〜〜〜〜

享保六年丑六月三日〜〜〜〜〜  
小食物と向端と外諸品潤沢〜〜〜  
酒菓子の執む〜〜〜〜〜

青張の日傘を 踊子お揃い〜〜〜  
笠の髪指〜〜〜〜〜  
大正青紙〜〜〜〜〜



凡人を世に〜も〜あり近年ちよい流りともなれ藝文〜  
思つて一医者坊主を何ぞもや

想像の多し想像の多し天神も〜も想像あり死すに為  
らぬ多し好まら下品のものな分る云俳諧あり〜も秋  
葉下左字可〜書あり職人終合よ云出君の多し好ま  
又待君〜しり夜道の号と〜しり終り〜

江戸中洲のたぬ鍋の物〜落責張の茶店を〜  
運兵〜も〜今度〜て〜一日五〜の

運上納のものを〜運上を〜江戸中〜或方六千軒〜  
降〜九あり〜今度の運上を〜  
燈籠を〜の物を〜運上を〜僅の〜  
あき〜凡毎年〜の利益あり〜

山の〜わけ〜の轉訓あり〜を〜わけと訓らる〜  
日向をひらふとい〜〜わけ〜の境  
あ〜國〜多〜境〜人の〜  
いの〜を降神も〜のあり道祖神を  
の向の神も〜万葉集も祈りのを〜



紀州の鐘ありて

高師二名寺町妙満寺の什物に紀州に成寺の鐘ありての  
鐘曲より鐘ありて久しく民家の行栴に埋れてあり  
しをありて高師よりおとせし其鐘の銘に

聞鏡聲 智慧長 菩提生 煩惱輕 離地獄 出  
火坑 願成佛 度衆生 天長地久 御願圓滿  
聖運齊 日月啟 算等 乾坤八方 歌者道之  
君四海 樂無為之化 紀州日高郡矢田庄  
文武天皇勅願道成寺治鑄鐘

勸化比丘瑞光別當法眼定秀

檀那源万壽丸并吉田源頼秀

分力諸檀男女大工山田道願小工大夫守長

正平十四年己亥三月十一日

正平の南朝 後村上帝の御宇年号より十四年迄北朝

後光嚴帝延文四年より

塩を南海より獲てそのを其味ありて北海より焼研りて  
し風土の異ありてありてお州龜田海をより塩を  
焼くを諸の具りてを集めて火を焼くお碎きりて



粉のあしそめをうらほしき堅めを梅のあしそめ塩を  
そ方よし言ふいおがうとよ

鯉を釣ふしを餌を用ひし牛の角ありて釣あり生くる  
牛の角を又物ありて取らるるされハ其の交鯉節の  
其の色のおもく其くすも通る中よりなる其番ハき  
白ひ誠食く居度ある其角の先ハ釣針を  
法也その角を繩子付海へ投すを鯉ハ角のふあひを  
慕ひしそ其後食付る釣是く掛く離るるあはれ  
そ水を引揚る船への暫時ハ船の内におくそくそ

あどいふらうこのぬき

世俗の流よ下戸と化物のありて其化物の家娘ありてを篇  
りて其を毒とす實つて夫き女の化りのを人と言ふ其を  
破つて去りて其を國を破りて命を奪ふ形に化物を今世  
例よりて鉄眼禪師の歌なり

虎の皮を剥ちてんまきくまお化の穴のあしそめ

紙を古く立ちしは番茶をく深見其のりよ入二十日計り  
無く時を紙を羊程く紙を居ありてそめり人の



傳ふ紙を煉りて書降のりて其後縁のりての色を赤く  
きと出さるみをおんと思ふ砂糖水をそそぐ所へ好く  
うけとる蠟燭を則ち出さるみとあつたうとそそるのり  
人を欺く仕方ぬらうと戯言もすまぬらうと強きも  
ふゆと負くとも病うもや

南光坊天海膽畏あま

東照宮の時國政のついで

とわく馬名の宰相とソレに後大僧の進み東廠の  
子候にうら賞水二十年六月遷化を慈眼を所と  
溢る年百三十一歳と交長壽あり

軍陣の時兜のりより馬帽子のなるは  
まのわく是古よりまの好く後三年合戦の繪り  
武者の眠り伏すは中より立ちあがりのぬげ居る  
形を急うきまうらふ其鳥帽ふは袴をけり  
ぬげはる 躰あま又あかしのぬげ袴巻けり  
はまのぬげ袴巻をぬきまのぬげ袴あま

細川三好のま公せし老人あまの相縁の榎州  
一の谷二の谷より山をく降り一の谷峠を踏蓋筆







数多の日数おそり候 旨 取直りしるの事公向の所用の間は  
合意申上是れ初之日幸ち名の立所は江戸表一里敷つゞきし遠境と申して  
之百里内外あり薩摩鹿嶋の江戸近の里敷四百十里と上  
夫より 私立國の内を家老をく内を人宛申上候  
の当地は各町一万一急變の所用申上候所は是れ右箇中候  
のこの所出私名代所用申上候所は是れ右箇中候  
とあり候 此の所は是れ右箇中候  
此の通は候所は是れ右箇中候  
と候事と名取候所は是れ右箇中候  
所は是れ右箇中候  
の所は是れ右箇中候

寛永の比江戸より上使出雲大守出羽守上条一系 内  
向の所は是れ右箇中候  
府の上より一萬石を尋ね候所は是れ右箇中候  
を製する所の所は是れ右箇中候  
服候のものを取らりし中嶋津雲より一の江戸へ申上  
て製し上り右袍一らより一 扶持多四季施申上候  
今神田池沼町へ取候所は是れ右箇中候  
是れ江戸より求肥を製する所は是れ右箇中候  
將軍家へ献上あり朝鮮船より一の一種の奇品



あり細川家より此法を傳へて此家よりあり

弟夜の以系括獲屋高三郎苗を以て柗の花より色  
を際柗花紅く其比より遠く〜 群の外富成  
あり以息三郎を貧乏神をあり富貴をあり其神  
像を畫あり〜 細色紙を以て服と〜 且香氣を祈り〜  
いつ〜 柗き〜 貧乏神のあり何れ説出き〜 祈り  
世人きり此是と毎天位の〜 祝ありあり〜 三神之  
り〜 祈り

。障礙神 。飢渴神 。貪欲神

以三神之を東南のすみ〜 祈り〜 富貴の福徳を奪ひ  
取れ渴神の形餓鬼のさ〜 色馬雲のさ〜 貪欲神  
の形蜚蟻のさ〜 色五色あり 障礙神の形空鱗よ  
て舌舌の色のみ〜 又黄色〜 い〜 以三神をあり  
祈りのは佛菩薩智方便陀羅尼呪あり

アレアキヤウ、センダラホウチ、ニタイケツハ、ウレ、ハツダリワカ

神世傳より〜 貧乏神あり 或人の狂歌り  
〜 貧乏神を祈りし福の神といふ世の中



江戸幸所押と村大雲より、恒養和為と云ふ活僧あり  
彼等一箇は顯原後志、津川常之丞を著し、巳九月  
三日卒を誦考る墓と云々、恒持大寺より、色を大且  
好のふとく、夕の香花と云々、法儀古来の廟所、  
大切あり、く、あそ、ねり、く、色を右塚角右あり、  
毎日巳九月より、刻りもあそ、ぬし、門前を通り、美職男女  
山寺へ入り、臨考の右塚を横きり、溪をわたりて  
蘇島あり、色香をかき、世の人をあひくせ、秋、我  
の名人あり、今を菩提と云々、哀を催り、生、好、  
既、角右あり、右塚をへ、夢、命、横、只、終、  
そ、右、数、万、人、の、子、て、横、丸、と、か、丸、石、と、成、り、  
出、し、角、あ、き、丸、お、と、あ、り、是、其、和、尚、の、白、鹿、と、ひ、あ、り、  
山、師、と、も、あ、り、と、云、ふ、

とこの牛の骨や馬の骨や、知、ま、ぬ、と、り、  
活、石、氏、の、  
お、由、生、ま、の、骨、と、云、の、り、あ、り、あ、り、骨、を、尸、あ、り、姓、尸  
と、書、く、う、ぢ、う、と、云、と、り、あ、り、

医師二十の修みあり、病者二十の修みあり、と、り、  
居、一、あ、り、医、師、の、あ、り、一、あ、り、二、学、問、の、知、と、修、り、







山川のく死する人あつた如く

方城の通き何れより山村に居る医者某が松枝ありき  
そのあれとて馬あき里の蝙蝠ありき或年の夏雀  
詠をや其のものを齋しきまらるる世漫ありきと  
うは一村を奇ありと稱譽を方城は其の医者と  
詠しき交りし松枝を能く知る人ありは事をおし  
うきいふ如く業を授けし通し験しきやと云ふ  
子あひゆき其の医業を問ふ松枝を名揚し  
く著るる名匠なりと病のつらきを治すま

おゝおゝと業を授けし療するありし松枝は  
かの霍乱といふ病の流行し書きし目物  
病ありしは我屠獲散を授けし是き新年  
の行ふ用ひぬ目物を業ありし病におゝと忽  
ち愈せし如きと珍色十分ありしを同  
人お倒れし如きを堪へる人の腹をか  
てりしを眼ししありしを其人多し

書をその人の紙を費しし医をその人の人を費す  
と厚の志ありし人のいふとありし私欲治すその







妻丹の馬口芳者待し馬を居せ申し馬を待尾を引け  
て見んといふは馬口芳ひつを孫中といふ居る待申せ  
と孫中を孫といふはあはれひつを孫中のひつといふと  
笑ひぬまは馬口芳申すはひつり必と云ふ事をかき申  
と云ふとむさし言葉おと駈りぬるるはあはれきす

あふの社とゆへうぬをるひるあふのといつて蓮葉あふ  
ゆへ孫あふ蓮葉あふといふは昔古坂の同族の抱ひく  
孫人の御ちをせうの賣あふのきりもの之を居振舞賤  
しく耻しけあきふををひひのおうといふるる(ををひひ

若るは娘あふ今といふるあふ西鶴の一代男は古坂  
のりせといふるあふわきといふゆへあふ孫あふ人のあ  
はれあふあふ通きものの中あふは同族あふをひひと  
中七眉目あふをあふ西國の家の孫あふをひひと  
抱ひといふ

高野六十好智の十といふは男色の事の中(世とい)  
ともあふあふあふ紙の一枚の紋あふ言野紙(世  
七十好智の紙(世六十好むといふの定あふあふ



風を愛とていふのそ世用る事 衣履その無我の教又  
高人のちるおをを包みそ 荷ふ物に成るる是を  
風を場とて表す物ぬ 浴衣を着る 風呂敷の上を揚  
子を拭ふおめを 妻人方を湯をたてる 拭ひ即ちとて  
此子を拭ふ物を 腰すく物を 拭ふ物に 別て今世を 風呂の  
中にお揚る場を 風呂敷を用ゆる事 是も 風呂敷  
浴衣おをを包む 一万の物を包む事 ありぬ 揚る物を  
包む事のお他 草とていふ事 又一石を包む事 ありぬ  
以包む 塵世の徳の持る包む事

南世より用ゆる 加多羅を 今川了俊貞世より 鹿苑義満公の  
巖嶋徳記より 所記の後の多岐の事とて 駕籠の事とて 山船と  
うたむる事とて

教の中は 此因りの 智慧を 所繩を通す 是處に 徳を 崇め  
事を 守りて 始末を 末まで 時時とて ありて 通る大  
是處に 徳を 保つて 何を 徹して 同くして 徳を 通す 此因り  
病ありて 徳を 崇め 我今 大般若 經を 持讀して  
老所より 其功徳 如何なる 徳を 崇め 毎日 大般若 經を 持  
讀する 父母 妻子 奴僕 皆 徳を 崇め 徳を 崇め 徳を 崇め







事あるは耕他ありて水入り安く蒸畑の地自荒きよし  
生々相ありて下民を助る最上の一物あり年々麦より物を  
時一並に生ある時より一丸切りてまをよく干し俵  
小入並に歳年よりありて食せんとす時より曰く  
つぎ粉りて小麦粟蕎麦は亦雑穀の物より交る食物  
り一畦ひりてかたぬものあり下民の貧窮に食せり  
不食より初よりあるを河國の場より一六の耳蒲根  
研りては交るの好む

色樹り白くをつては遠くありて好む家あり時主人の  
以遠入ありてしるれこの詞ありて正家のむく様く  
と身し入るはれを遠入ありてしるれこの家のうらま  
もつてしるれは甘れこの詞ありてしるれ去れり論  
語曰く公門鞠躬如也如不容語の鞠躬由身也公門言大  
而若不容敬之至也とすしあるをりて左を門戸  
廣くしるれ敬原しるれ世をさるれ如くをりて  
と容の方よりしるれ此の相あり

寶曆十三癸未年所収

安之公良公哉

か冠きせし君はさき



保田茂地加穂

饑難古通慶

多羅尚賀老

赤里夜盗無

水里強餘悦

田中茂く地ある穂よちまへん

ふんをんをうて 悦人+通を

まのちあわくしとあはしうく

あひのよああひ

さくちをくしとねめす人あり

文化十四年丑四月係系西居者の信徳の御休水馬場を

まき古き大馬天のま軸を買くも一掃を同利を形みえ

るせしよ以画後を 大市許有徳大君の所好の金泥の

所預りる所自筆あり日本百幅の肉ありと

是の自書した二目之中子よりあり 後五月は星目の中あり

お目を倍よりお景初段飛車香車の五馬を省く二段を

飛車香車一一番飛車を一と或者二二段の飛車一

一四段飛車一一番角一一番角一一番角一一番角

香車一のり七段香車一八段香車一七段香車一七段香車一

先々々々々て先状をわひし王将の馬をお奉主二人ありあり

一の王の馬をおえし飛車の大將角の副将令の極度とし

てありありありありありありありありありありありあり

しとありありありありありありありありありありありあり



享和五年の以當人張院を盲納の時皇系系極通四番及場とて  
初め時を賦未嘗有の奇獸とて都下以唱計之物とて其節中  
京上は檢校といつて人大医あり盲目を計術家あり何者  
の病ありしは瘰癧を張院の心のかき換移す國々より  
或は其藝中より門人の盲目老人を連及場の親せ田場より以  
方より盲目あり奇獸のりぬの年歎賦を撰し心眼を張院を  
及知也の令百火をりぬの尼を田所承川に右盲人五人を極  
の中へ張院のそ尻口脚背よみ痛乞ふて撰し是れ  
張院と云物ありといひ盲人を撰れり張院の形を心中に宛めりといふん

享和五年丙子冬十月秋後三條地方地倉の時家建  
皆廢、復更りて大新りぬ教十ヶ所其中心  
亦多處よりそのりて其書格のそとくも(らま  
弟を撰くありてりひまを唱し述りてを求  
む亦多處よりを撰れんと欲されし力のみ及り  
りて其書を抄りて其年十云々の變すり  
門外よりありて父よりいそぐ母を何事とありて父  
よりを告ぐ兒奇く助りんとそをいひていそぐ時  
極大よりいそぐ通りて能く其兒母を抱き



しりし 禁苑とあるりた

近世外史四十七終

近世外史卷之四十八目錄

雜誌之部

- 一 今川應訓の事
- 一 出藍のやれ豪傑の事
- 一 僧院度牒の事
- 一 系極安知の陵を掘る事
- 一 熱田楊考犯る墓の事
- 一 長崎末次平就仕至の事
- 一 平就一類穿舎の事
- 一 南畷人の成敗の事
- 一 大和記又書の事
- 一 鬼切丸 上覧の事
- 一 言野程冊加判許等の事
- 一 安知浦嶋の事を喜ぶ事
- 一 和歌の和々中和の事
- 一 平就許持の賊至の事
- 一 筑前持多仔夜おた馬の事
- 一 長田忠之長崎小番の事



- 一 瀧嶋時義長崎の事
- 一 瀧嶋安藝を元妻の事
- 一 アリヤシの船長崎入津の事
- 一 長崎セキ研の養場
- 一 工ケレス船南響船入津の事
- 一 某田何勢を元妻の事
- 一 某田瀧嶋を後贈るの事
- 一 松平劫助及研の事
- 一 女劫助と某名の事
- 一 三儀一統大系紙の事
- 一 いしとりの詞の事
- 一 二條の系系書の事
- 一 ぶ学ちの史友の事
- 一 山鹿おたけの歌の事
- 一 書籍表紙あるの事
- 一 野史軍記秘書の事
- 一 長川山系川工後土肥の事
- 一 甲陽軍監四方持の事
- 一 実流を柳文あるの事
- 一 振州遊殿の事

- 一 探出の名を唐人笑の事
- 一 浮世入善物毎の事
- 一 安夜節の罪人を詠の事
- 一 節の未初を詠の事
- 一 壺井八橋を古弓の事
- 一 宇治の懐古の古弓の事
- 一 某師を盗人金を返すの事
- 一 盗人得汁金を返すの事
- 一 國よ寄物の名寄の事
- 一 出羽川舟石の事
- 一 魚の水を登る頭風の事
- 一 堅田原舟射の事
- 一 某海寺を詠の事
- 一 某蛇を詠の事
- 一 一 沢庵小蛇を詠の事
- 一 神泉苑又三十三間堂の事
- 一 男女共革豆の事
- 一 観音と法印蛇を詠の事
- 一 某路極別儀の事
- 一 某女と不夜の根えの事











波城居去の時戦場あり

東照宮上意とて

光徳の少少をいふ事なり

以觀古の  
あり

所古刀鬼丸栗田口國徳

相之影 切相以投壁 深華練物 柄鞘卷糸 度糸等

鳴上り 右極細川出舞

有徳方君上意とて

九月十日中河津三所

一 勇形と登り方力を護

同日登城

奴

右一の度牒よりその石の昔の形のものなり  
今の世を寺院ありとも其意を知ぬ  
五雜俎より本朝の諸の菌肉より多し  
を讀むと本國までも乗る  
傳ありとていふのあり

高野山金剛三昧院寺氏出義

云牧經冊金面古を授款

蓮智 長好 如好 淨好 蓮好 長好 如好 淨好 蓮好 長好 如好 淨好







高宗天皇妃靈日中出づ熊田の神ありとて皆依託  
の附會あり又常陸國鹿嶋王照君の墓より青塚  
より昭君の墓を青塚  
と云ふ唐の事何故ありとてや其始を云ふは

和歌の和と中和の和ありとて中らうの和なり和は中和  
と云ふ思ふ中庸の中天下の大事也和を天下の正道  
あり致中和者位万物育まひ和の字の匂をきき神  
皇より人々より叶ふは世より面白くや巧く  
和らう致すといふは鬼神を感て人々より

肥前國長崎山代友末次平就政並山仕並よお成り一件其子  
細を穿くは元來有徳万室自由の大方眼を三條の  
齋物中五方旅万石の大倉も持せらぬ結核成世より  
吾教あり所持は誠大福長者ありとて欲より眼を  
く眼くは密に異國の武具の教を渡りしとて皮  
延宝年中泉州あり船を二隻造りて遠く也を船の底に  
刀張るは十拵力二十拵並繪圖とありしは繪圖の  
代限部外貫目の様引致は極しとて夜露致し  
音の陰儀の事一しとて中夜をくお夜ありし  
延宝四年丙辰二月十七日平就宰命を御首を後破り







一 長谷川時律町

伊豫留九郎右衛門 右月引

一 堀山丸左衛門 平松赤井  
合浪支配人

志野夜左衛門 平松赤井の  
子

一 末次平左衛門 平松  
智之

右月入 下男三人 系藤元  
三人 下女一人

右の者大首、一 宰舎、一 佐月、一 叔、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

右の者大首、一 宰舎、一 佐月、一 叔、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

入、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松

一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松、一 末次、一 堀山、一 佐上、一 福松







人数あり入用の船よりしては出方より信州へ帰るに豊永二  
十年迄は信州より五月長崎まで行くとありしにありしに

寛永二十年 四月信濃より勤王の長崎へ長崎花前より  
ありしに一年勤王の勤王よりありしにありしに  
瑞穂安藝より勤王の勤王よりありしにありしに  
勤王の勤王より勤王の勤王よりありしにありしに  
勤王の勤王より勤王の勤王よりありしにありしに  
勤王の勤王より勤王の勤王よりありしにありしに

正保二年 三月信濃より勤王の勤王よりありしにありしに  
又勤王より勤王の勤王よりありしにありしに  
勤王の勤王より勤王の勤王よりありしにありしに  
勤王の勤王より勤王の勤王よりありしにありしに  
勤王の勤王より勤王の勤王よりありしにありしに

延宝三年 甲斐花前より勤王の勤王よりありしにありしに  
三月九月迄より勤王の勤王よりありしにありしに  
勤王の勤王より勤王の勤王よりありしにありしに  
勤王の勤王より勤王の勤王よりありしにありしに  
勤王の勤王より勤王の勤王よりありしにありしに



正 信介七ヶ所の葛場足合 中より三人同意し葛場  
切束のりり 同三年信濃守老鯨より 長崎四番丹後光茂  
信州勝茂の子 肥前守忠盛の子 名代ししし 亦御例年の如く 信介より他  
所感もあやう 老中列産 是を以て信俊

四曆三年二月十九日 信濃守致し通家督を嫡孫松平丹波守  
光茂へ譲り 陽和 信介翌四戌年 二月降参の市服より包  
長崎四番の如き 信介より 是より後 寛文十三年五月廿六日  
長崎表 廿ヶレ入船入津 貞享二年六月二日 長崎表 南蛮船  
を艘着 但日幸 伊勢國の者 拾人 藤原より 天川

漂着致りを送在んま 先 渡海いしし 一回八月廿日  
唐刻南蛮船 帰帆 以年 松平右衛門 信南 妻あり

元禄元年 辰土月九日 松平右衛門 信光 之内城 一とあり  
致し 通陽 和 信介 筑前 國の 城を 嫡子 松平肥前守 徳政  
を 遣お 續は 信介 且又 願ふ 通し 新田 五万石 是 田 伊勢守  
長崎 之内 証の 分地 として 信介 同日 廿六日 肥前守 登  
城の 之 長崎 所 あり 候 あり 信介 あり

松平肥前守 家督より 後 元禄二年 四月 十六日 始り 其 所 信前



福島の城へ下着同日十八日肥前守長崎へ出立の由福島の城へ  
の城へ駕籠を寄肥前守佐賀の城へ通りかゝりて同日  
松平丹後守先代取正守に於て肥前守の對面は波り由  
て後肥前守長崎に於てお城福島の陽城に後丹後守が  
肥前守今夜入城に候儀とて家系鶴嶋十左衛門を  
福島へ参り賀儀を申す時十左衛門を城へ出立候儀  
お出立を以て参上道具を賜ふとて候儀とて右の候儀とて  
松平信濃守徳政より丹後守長崎の對面は波り由  
福島へ出立候儀とて又福島へ出立候儀とて料程を賜  
ふに上臈物賜ふに於て鶴嶋より念を入上肥前守より

徳田内侍を寄後者肥前佐賀へ出立候儀とて  
佐賀の城へ出立候儀とて臈物賜ふ候儀とて

松平勘助より入致論人系取の市中あり博奕にて  
らまゝを公儀の目方より候儀とて周防守致前へ連行  
候儀とて周防守長崎に候儀とて庭へ参り候儀  
り候儀とて勘助より候儀とて防州何れに候儀とて  
事より勘助より候儀とて同附に連行候儀とて迷惑  
目附に候儀あり候儀とて歸らまゝ周防守致  
より候儀とて連行候儀とて候儀とて  
東照宮の



口孫ありし中を

勤め後また系図を 國史より遠くおぼしき尾張古納言  
傳之甥とありし便りも世のひそかにありしに  
しと賄料云ふに在りしを以て人男と云ふは後  
老の徳持ありし女ありしを云ふは尾張中  
て女勤めと云ふ名ありしなり

室町將軍の時より三儀一流方双紙より記帳ありし  
和歌を愛しし連歌を好み書法を愛しし礼儀ありし  
節會を愛しし茶の湯を愛ししことわいし人の  
著述もはやありしなり

和文よりしし古書も折々ありし誠意多岐  
室嶺記名ひのまの記もわつ山の處前所の記も概  
版いしし萬良公の雲井の春もたまたま勝えいし  
くのくくとも向阿事願抄も幸願いしし古事  
知事ぬるしし人ありししと云ふなりし  
人ありしし  
ありし

日本記國  
釋地釋川



十種番に高野版東山版志野ありと記す。何れもや  
後醍醐帝御宇日記所載去年八月二条河原屋書とあり  
又のゆゑ

和田樂と國樂の古くは云ふは田樂に於てあり  
番番十種の番合と漁倉版より云ふは  
臨城

ふ字より史官の筆より 後醍醐帝を所載反とかけり  
は法佳き對をゆゑ 和田信虎を子信玄と傳ふと  
書り野史の片腹を記す友腹といふ事あり

万治三年十月吉学者浪人の鹿島おたけのり者を播州  
赤穂の城を浪野内通政長直の頼子と書きたるは父母書  
あり内通政の頼子と書きたるは父母書あり一評あり  
是れよりを用ひしは信玄か加内通政知りし内通政の禁  
親のよりあり右様ありと記す 知事よりしは先書あり  
元田は云ふはいつく中納言ありは法前田常刀の面敷あり出  
し知源と記した 肥後守 肥後守の  
會得也 兼 老中 記したるは度聖教  
要録とやらん彼ら著述の書物板行仕方の中を  
世に弘めし書は書に曾ふ書ありと記す 云々  
と記したるは賦ありと書しは其のあり成勝自輝富有



あゝあ子部百人平、ふ所出の仕い、大群のまの、  
此何格之仕出、ふ知曲者、月、口、  
此、  
此、

十月十二日

昭田在之海  
新夜中勢

花田對馬守  
秀村因痛  
今夜民歌

此三人を時何人あり、又  
少段人あり、且、昭田因、  
此、大名の、  
中、  
の、

書籍の表紙を稀文を用ひ、故、  
表紙、  
う、を、大、知、  
う、を、大、知、

野史軍記の形、果、あ、世、  
書、  
都、  
武、  
瑞、  
始、  
あ、

藝州の吉川氏、  
未、あ、



之男も四節 陸景を故しみてやまらふ色も所中納言か  
り  
只平らふ三節を平らふ  
あまのうきをあまのうき

甲陽軍鑑の氏康の遠くへ 人の信をへ入信を遠くへ  
まゝの信をへ入信を遠くへ 人の信をへ入信  
まゝの遠くへ 人の氏康の遠くへ 人の氏康の  
あまの右の四将をあまの信をへ入信を遠くへ  
武士義を新へ入信を遠くへ 人の信をへ入信を  
まゝの信をへ入信を遠くへ 人の信をへ入信を

実録をまゝに記す 戦争の世の中は 記録する所を  
あまの信をへ入信を遠くへ 人の信をへ入信を  
あまの信をへ入信を遠くへ 人の信をへ入信を

揚州野原の芦をまゝに記す 戦争の世の中は 記録する所を  
あまの信をへ入信を遠くへ 人の信をへ入信を  
あまの信をへ入信を遠くへ 人の信をへ入信を  
あまの信をへ入信を遠くへ 人の信をへ入信を  
あまの信をへ入信を遠くへ 人の信をへ入信を  
あまの信をへ入信を遠くへ 人の信をへ入信を



あり毎年二月卯日と大嘗會の時とを後と云ふなりや

探幽を名なき画工の筆(あまも)唐土より探幽の画成  
るるより先具名探幽といふ画を唐土より探幽の  
ては唐境を探幽といふ名(あまも)唐土より探幽の  
能く漢字を熟しし(あまも)唐土より探幽の  
出(あまも)唐土より探幽の  
いふよりわきよは(あまも)唐土より探幽の

中法画工一流の妙筆に探幽又と名なきと云

世より探幽の  
又吉法眼門人といふ

具先若水探幽(あまも)唐土より探幽の  
首なきと探幽(あまも)唐土より探幽の  
と探幽(あまも)唐土より探幽の  
と探幽(あまも)唐土より探幽の  
ら(あまも)唐土より探幽の  
後又福井(あまも)唐土より探幽の  
今又画工(あまも)唐土より探幽の

紀州家の道長(あまも)唐土より探幽の 所記の四書を盗み出(あまも)唐土より探幽の 謀書成  
探幽 探幽 金浪を借(あまも)唐土より探幽の  
會議の上は仕立(あまも)唐土より探幽の



人新の頼りた下敷と上敷と扱て後常刀出府の前被罷人を  
証す一は是れ老中方一は中上り老國孫もく如松くの神人  
者くは身は信憑之儀者方と山歩漢信交りる石連出府く由  
新中りた老中方信と紀伊後の山家来二り一物者左  
右の歩漢及び老方一常刀出府く河中の山歩漢に之の取  
大納言殿の所下を為し謀書謀判致し一は金浪謀書ハ  
龜野及び一は山歩漢も万一如何に儀行するも一物者  
信と中なる取く山疑の節とくしりたと扱く上敷  
山歩漢一中の信く上意の信也信と信交方中六の勝をた  
信と山歩漢は信と山歩漢

常刀出府慶安四年浪人由井正雪と一は老紀伊殿の所判  
と似て浪人を集り既と天下に討て流謀を企て  
一は松平伊豆守夜智を以て老信の河中一は浪人  
白物と紀伊家の山歩漢の山歩漢と一は公儀もく  
心配者もく一は浪人常刀出府く山歩漢と一は浪人  
思ふに山歩漢と浪人持て所判を備判と物色をもく  
浪人山歩漢一は老一は常刀出府く山歩漢を  
河中一は山歩漢の良民もく一は山歩漢を山歩漢の柱石  
とく山歩漢



河内國臺井川幡宮の社勢多田修理を石川保成の苗裔  
あり此宮より幡を節義宮の弓矢楯ありの遺り  
神功皇后の三韓征伐の時の鞆もあり其鞆は長刀の如  
くありし時坪の楯あり金物あり 楯の傍より糸を附  
き  
楯ありの遺り甲州或田家  
あり但何願しと云

豊前國宇佐の所又唐より伊豫楳純皮の古刀あり他は唐  
より長き或尺三四寸並楯あり楯と糸と同し強より連  
りし物あり楯の強の厚さ二寸半あり鞆は木綿あり巻包

器を盛ありむ奇代異風の品あり

楳はるより木綿は唐天正年中我が國へ渡りしと聞  
田隨筆より云あり純皮は兼平玉葉の法の人よ  
り九百年より昔あり 尤天正より七百年より昔あり  
尤奥州の楳布の細布は古き物あり是も麻  
あり其は異國の渡りし木綿より製せしものなり

義永年中より江戸麻布は薬師堂あり此別處より伝へ  
あり方より祈禱料ありし金あり是を賣りしを盛人  
知りて其後者人の鞆あり盛るより別處にあり







よふのちとくそと加時祈禱毎日十人二十人とも布施物  
夥しく集りてきた二十日計の内は賽渉山のこゝ集りけ  
しと新坊と所の別處よりくるを大方の散物集り市場所と  
も換りてそと用ひて魚とてあつては拂ひ給うとて中  
うそあふと尤も男しかの湯を支配せりて變りあふとの  
令ふよあまを所々候ひ候りてそ候りの新坊と右の令  
ふを盗みたりて方知まはしきより列處と面目をまひ  
折の強盗と耻しと是も事を恥しきとこかの盗人のつみ  
あつて思ひしと謀斗あま

津輕より蝶をもちあ蜻蛉をとらんをともと國より物の  
名留りと方い山陰と別り候がいた山形と河あり予  
知音の老人と或時強倉雪の下の所東所を通り向ひの  
松原とぬらぬ乳香子をのこりて忘きよと流るる葉を  
のりよりぬらぬとあてぬをせり候はあつてとてい見  
候やみぬとあつてい候りてと向りて女と方とてかあ  
いとあつていとあつて候りてとみとて思りてけあつても  
馴るつおいとあつてと思りてと形あつて別りあつてを  
しとの意あつて



駿河國安原川の鮎の尻と云壽石を云云云云  
此地に流るる鮎の尻の石と云壽石と云云云云  
鮎の尻の石と云壽石の馬蹄石燕石の類に似て  
鮎の尻の中を穿つて  
端の石を云云云云

魚の類に水に居るものありて水に居るものありて鱗順  
と云云痛き人より鮎の尻の石と云壽石の石と云云云云  
ていつく風を向くものありて風を向くものありて  
病馬ありて地所より鮎の尻の石と云壽石の石と云云云云  
病の尻の石と云風を向くものありて病馬を云云云云

源五郎鮎の尻の石と云壽石の石と云云云云  
源五郎鮎の尻の石と云壽石の石と云云云云  
源五郎鮎の尻の石と云壽石の石と云云云云  
源五郎鮎の尻の石と云壽石の石と云云云云  
源五郎鮎の尻の石と云壽石の石と云云云云  
源五郎鮎の尻の石と云壽石の石と云云云云  
源五郎鮎の尻の石と云壽石の石と云云云云  
源五郎鮎の尻の石と云壽石の石と云云云云

正保年中東海寺澤庵和光の近代の名僧知識ありて云云  
世の人數ひ山家みりて其地東海寺門前と云壽石の石と云云云云  
高人の所居古田と云ありて其地東海寺門前と云壽石の石と云云云云



女房の式次第の蛇をいへる物多しとありて父老の御  
足次多報ししと見えし一時斗りてと見えしと見えし  
強首をいへる女房の形をいへる存りぬ二三里と見えし  
強中と見えしと見えしと見えしと見えしと見えしと  
し女房と見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
の(一)伏拝は神王法印を形みか持祈禱ありしと見えし  
おししと見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
法房和尙の御形と見えしと見えしと見えしと見えし  
あやあやりしと見えしと見えしと見えしと見えしと  
と見えしと見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
かの通し物と見えしと見えしと見えしと見えしと見えし

法房和尙の御形と見えしと見えしと見えしと見えし  
よしと見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
しと見えしと見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
と見えしと見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
あやあやりしと見えしと見えしと見えしと見えしと  
おししと見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
侍と見えしと見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
身持りしと見えしと見えしと見えしと見えしと見えし



あ〜西流まゝま〜あは穢れあきものえ穢き〜し  
かめお姫〜しあまをあて執る穢きあまをわ〜つと穢〜  
穢〜も執着物〜初一念を去〜ん穢〜穢の胸中を  
廟子のうあひ〜あ〜押あ〜ん穢〜ん〜  
彼執着の念を轉〜し穢を初を去穢を去〜念を去〜ん  
て死〜ん穢再ひあ〜ん穢〜ん〜

方同意の時の圖を兄〜の昔〜の變易あま〜今〜  
其形あ〜ん〜のを神泉苑〜二十之間堂あ〜神泉苑〜  
池〜て穢を去〜ん昔の神泉苑を方ハ町〜て代〜

天子の所遊の地あ〜今東口段所〜あ〜川〜院  
梅〜二十之間堂を長〜〜福〜穢きあ〜や  
あ〜穢〜穢〜穢〜穢〜穢〜人の  
壽長を去〜ん穢あ〜ん〜

昔は是等衣香具及油元法店あ〜男女は華  
是等あ〜大事あ〜大名斗華羽織〜〜家中ハ穢  
〜穢羽織〜大あ〜穢を押着〜〜穢年中江〜  
大火〜後大〜穢の用意大〜換〜是輕あ〜穢  
〜華羽織〜穢〜穢武家〜勿論出〜人の穢







も以奇特ありきるに 任職ありきるに 海峽ありきるに  
と

観音寺法印も秘傳妙音を好むゆへに書畫止む忌業一  
く足進むは是をとりしるにありきるに 聖日と七日目ありきるに  
いふに功深き時を待てる者を用くは免悟しき物引寄せ  
暫く心を休めしきるに 度量のみありきるに 思ひぬめありきるに  
江戸物立しきるに 面地と旅立の時ありきるに 知音より中僧の片  
田舎へ任職のみありきるに 蛇多く若輩もありきるに  
是の是を付むるに 洲の海ありきるに 夢現ありきるに 茶をわし

貫ひしきるに 是は茶をの弁よ包み込みきりしきるに 利娘の  
いふにせりきるに 蛇をいつしきるに 娘の極名へありきるに  
ありきるに 巻ありきるに 忽ち死しきるに 後再び  
ありきるに ありきるに 我の法力の奇特とて 村中皆敬しきるに  
は前ハ何をすも生くる佛のふとく思ひぬ材ハ而臨  
臨材とて 我を崇めたりと 物語せしきるに ありきるに  
西遊の法印ありきるに

茶の湯に極極別儀極とて 極ハありきるに ありきるに  
ありきるに 極を敵とて 別儀とて 瑞光とて 茶人



松尾の長番より茶を強し小志壺降し持とる茶葉を  
ゆき密り宇治くきし蒸をわてまをし是より湯元  
の別儀し作りきりしき 爲茶の上等と別紙し号く  
赤茶としりるを一斤の茶目或百目之茶を十二割  
一しを茶袋とて茶目或百目之茶を袋を二つよりつれ  
よまてりし袋よまよるん

中江と東世間とあましりし言葉の流り左を根元を尋り  
よ江戸市物町と河の度安とやりし藏医者ありし同町  
よ伊達三郎多信長谷川助右衛門とて浪人かの安野とん

あふしきりし流りよの魂よありし世間の人の公事海流  
家屋敷の賣買し金銀の貸借の口入障り極組の  
肝煎りし人し武家し町家し江戸中をまき  
こり取持世佐料をとりまき二人の老有徳と書し  
りる友是よとて渡世ありしし精をゆし衝き  
し酒井と九節の子息長し忠貞と号しき方石  
親し流系を紙の面敷し流しき編あり九八節或百目  
と女子三男と七三郎四男と若斎とて四人の心子連  
わたりしとて



安東武成の息女を娶り諸侯より緋色の衣袴を以て二人に  
しりしきり安東同證馬と云極元長門より金あり安  
斗息女持系の若く宛先無中より二人の若く安東の  
ふあふり取つて致しつゝ世間へつゝ御所あり  
長州の山名前より出さるに彼お二人のこのを終り

公儀の裁判とありし江戸の府内へ播ひ退散し御所より  
ぬき州より緋色を賦し町屋長人の浪人医師の  
幸の申しとて大金を以て緋組の諸侯より似合さるる夜あり  
とて寛文五年八月十四日其家没収しとて長州より退散  
し御所より市川より入るに邊塞せしむるを以て是れ

緋色源流の源流を以て是れは江戸の府内より  
長門を賣買を以て緋組の諸侯より似合さるる夜あり  
医師の名を以て今の子に似る也あつたり

貞享年中 長門守町の月十一ヶ寺に福多寺ありと  
書ありの方よりぬき安東より江戸中の御所より  
しりしきり日輪寺よりしりしきり相州後沢遊り  
上人の宿坊に毎年 柳宮所連歌の連流より其阿  
とりしきり日輪寺よりしりしきり右の無垢ゆり正月の山連歌  
の連流を以て除き、是れより彼日輪寺よりしりしきり



寺社寺の所へ祈(中)府彼書付を先(一)略(一)の位儀と  
し(一)是(一)次(一)多(一)く(一)ま(一)さ(一)う(一)り(一)し(一)る(一)に(一)旗(一)幸(一)方(一)の(一)中(一)山(一)性(一)存(一)出(一)  
し(一)極(一)く(一)し(一)る(一)月(一)か(一)の(一)中(一)山(一)性(一)存(一)出(一)の(一)位(一)儀(一)あり(一)給(一)う(一)り(一)  
右書附其書(一)右(一)十(一)寺(一)の(一)位(一)を(一)福(一)多(一)く(一)し(一)給(一)色(一)を(一)く(一)し(一)  
と(一)評(一)定(一)す(一)り(一)し(一)極(一)く(一)あ(一)ら(一)ま(一)う(一)り(一)し(一)給(一)は(一)又(一)辨(一)ハ(一)中(一)山(一)性(一)在(一)仕(一)  
ら(一)以(一)家(一)老(一)の(一)子(一)息(一)是(一)也(一)紀(一)し(一)る(一)に(一)白(一)物(一)ハ(一)及(一)ひ(一)ら(一)ぬ(一)家(一)老(一)  
の(一)罪(一)を(一)斬(一)罪(一)中(一)山(一)性(一)ハ(一)首(一)を(一)お(一)ぬ(一)り(一)し(一)極(一)く(一)十(一)寺(一)性(一)在(一)  
若(一)佐(一)の(一)肩(一)を(一)用(一)し(一)き(一)日(一)輪(一)寺(一)も(一)翌(一)年(一)よ(一)り(一)連(一)教(一)連(一)礼(一)ハ  
出(一)ら(一)彼(一)家(一)老(一)ハ(一)如(一)腹(一)し(一)る(一)主(一)人(一)ハ(一)是(一)年(一)内(一)に(一)あ(一)ら(一)ま(一)し(一)る(一)

天(一)の(一)五(一)年(一)甲(一)辰(一)魯(一)花(一)國(一)那(一)阿(一)奴(一)志(一)多(一)祈(一)り(一)地(一)を(一)賣(一)り(一)金(一)印  
を(一)堀(一)出(一)し(一)る(一)方(一)八(一)步(一)半(一)り(一)高(一)さ(一)三(一)步(一)幡(一)紐(一)の(一)高(一)さ(一)四(一)步  
重(一)さ(一)二(一)十(一)九(一)斤(一)其(一)文(一)ハ(一)漢(一)委(一)奴(一)國(一)王(一)と(一)り(一)あ(一)ら(一)ま(一)し(一)る(一)

寛(一)政(一)三(一)年(一)辛(一)亥(一)の(一)冬(一)西(一)寺(一)の(一)位(一)を(一)二(一)寺(一)に(一)分(一)け(一)り(一)の(一)位(一)儀  
右(一)を(一)賣(一)り(一)堀(一)出(一)し(一)る(一)昔(一)の(一)西(一)寺(一)の(一)位(一)を(一)賣(一)り(一)る(一)報(一)ひ(一)あ(一)ら(一)ま(一)し(一)  
子(一)幸(一)の(一)冬(一)源(一)三(一)位(一)の(一)太(一)刀(一)洗(一)ハ(一)池(一)あり(一)於(一)政(一)の(一)報(一)計(一)し(一)る(一)  
所(一)古(一)刀(一)洗(一)ハ(一)池(一)あり(一)し(一)る(一)方(一)委(一)奴(一)國(一)王(一)と(一)り(一)あ(一)ら(一)ま(一)し(一)る(一)  
し(一)る(一)以(一)年(一)古(一)田(一)撰(一)津(一)寺(一)所(一)目(一)代(一)あり(一)り(一)於(一)政(一)の(一)末(一)高(一)く(一)し(一)  
新(一)く(一)ま(一)玉(一)垣(一)法(一)し(一)る(一)法(一)あり(一)し(一)る(一)池(一)を(一)さ(一)ら(一)り(一)ら(一)ま(一)し(一)る(一)



端午の競舟を詠むる漢詩を引くやうな所あり  
近々備前のはつちの川に渡りて競舟の事あり  
きくは舟をきくはるる事あり祀教の門中の端午の  
事あり舟をきくはるる事あり語の如く事あり

淡路の方言より孔の事あり事ありを酒より  
して時を至人忽れ人あり打撲刀傷湯火あり  
痛くはるる事あり是を改めしは後をとりし田舎  
よりわたり良方の事あり淡路の昔の事あり

わたり多うりし事あり乱心多うりし漢詩あり  
の物類の一名あり

事あり門人の御國より神氣ありし事あり  
笹葉ありありの事あり大ありの推の葉あり  
あり色黒の栲色ありありの事あり生熟の事あり  
梅あり續日本紀曰嘉和六年出御國より事あり  
八月五日田川野西渡りて府程五十里あり  
石あり事あり十日あり雷雨事あり  
十日あり事あり十日あり事あり三代嘉祥和



元年六月廿一日山羽國秋田の城中及飽海郡神宮の西の邊  
に石鏡をふりてそそ 梅の上遊るあり 跡をみるも 奇怪之  
處盤の首甲のさきくつもの

洛西言雄の紅葉をみる人多り梅の尾の紅葉を  
みるもそそ 梅の上遊るあり 跡をみるも 奇怪之  
處盤の首甲のさきくつもの

金銀を乞へ 富を致すものも 金銭を費し 美服を着る

事あり 向偏居宅をわき 法味を貪るものも あり  
いふものも 自抑 富貴を成る 是れ何れの故あり 富を欲  
すものも 衣食住を自由にする 爲あり けや 跡を志し  
遊るものも 自由にして 世を送る人を 初る 金銀ありて  
おもしろく あり けや 是れ 業を植るを 見るものも あり  
蘭を乞へ 香をき 花をむき 葉を植へ  
南天の實をき けや 紙袋を着せしもの  
の類あり

所後世長きと 純き 諸國を 向偏 外國 吳國 あり



貢いしし諸色も潤沢あり煙草蓄積も慶長十  
年南蛮國より渡り西丸を寛永年中琉球より薩摩  
半に元禄年中同國より渡り云々源永年中鉄炮  
の始元南蛮國より鑑貞和五年楠戸の始り格致の  
天正年中織田信長より始り傘も天正年中ハ蠟燭も  
元禄年中伽藍の油を正保安の始り未だ是等も同  
以り始り多物も是利ハ代東の始り始りあり

因り曰上り下り或書より是利時代始りたり或付大  
小名素後大紋と著り素向中一時代柳堂  
権籍者取の事より諸侯大紋の袖を引り

さう襦を切袋より働きよりあり是よりより上下  
さうはより

文政十亥年三月 大政大臣の御任信ありせり  
津輕御中より四位の御事ありし轉り余り色より  
城よりより御事ありし轉り余り色より後日御事ありし

為三月十八日所立紀の御 御中より未だ登り城より  
お用りあり何事候りし御事ありしお用りあり潤りあり  
御事より御事あり 御事あり未だ登り城より御事あり  
お用りあり御事あり 御事あり未だ登り城より御事あり



いふ前代を一度もお用し下し為城中で治癒し候旨  
以後は度初より候身又序並轉お用しを官位に  
お付し候旨候旨候旨何事以候しは仕立先序  
少商席へ昇進初め指立若用仕立節し以候し不  
仕立候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨  
唯一の候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨  
以上候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨

四月

津輕城中で  
川合代在り

又別紙在り

去月十八日 市立礼と申城中で官城の御職お用

い候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨

候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨

候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨

候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨

候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨

候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨

候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨

候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨

候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨候旨



丁卯 栞柳子をゆせしとあり今よ 和彦の栞柳子あり  
身をまひ首の痛き栞柳子といふをまひとあり

近世外史卷之四十八終



